安心鈔

底　本　森　英純　筆写本
対校本　文政五年　龍空義道上人木版本
＊両本ともに片仮名書であるが、今回、平仮名に改める。

西山善恵上人曰[註1]

南無阿弥陀仏と称する心を正因正定の業と名く、此の南無の心は我等がほとけを憑むこゝろなり。阿弥陀仏とは憑む心を彼の仏の摂し給ふ他力不思議の行体也。されば、我こゝろを南無と云ひ、彼の仏の我を摂したまふをば阿弥陀といふ。彼此一つに成りあひたる姿が即ち仏にて御座処(おはしますところ)を南無阿弥陀仏と申なり。然らば、観経の第八の観に「諸仏如来はこれ法界の身として一切衆生の心想に入り玉ふ」と説くは、凡夫の心のいみじく悟て仏とまぢるにはあらず。もとより「以無縁慈摂諸衆生」の謂れにて彼の想心の仏凡夫のこゝろの中を離れたまはず。故に「是心作仏是心是仏」とは説(とく)なり。さて真身観に至て「一々の光明念仏の衆生を照して摂取して捨たまはず」と説くなり。[①] 是を「彼此三業不相捨離」とは釈するなり。是をもつて、往生といふは仏の御心と我心と一に成りあひたる所を申すなり。其一になる処をば火木の譬をもつて心得べし。乾きたる木に火

註1 後の『安心鈔』に対して『略安心鈔』と言う。

① 底本には「説くなり。是を」の語を脱せり。異本にて補う。

をつけたる、何れを火とも何れを木ともわけがたきがごとく、我等唯知作悪の機、名号智火の仏果に摂せられまいらせて、今正しく三心四修別時長時機法一体になりぬれば、名号の外に全く求むべき往生はなきなり。此の正因領解の上は、正行の機根くだれりとて疑ふべからず、仏に常没の苦者を摂する大悲あり。行業疎(おろそか)なりとて疑ふべからず、経に乃至十念若不生者と説く。今は只ねてもさめても南無阿弥陀仏一行なるまでの心なるべし。是も名号に安心摂する故なるべしと云云。　西山上人

安心鈔

流祖国師説

南無阿弥陀仏と称する心を正因正定の業と名く、此の上に身口意の三業の行を助業と名く、助業とは顕業と云なり、顕とは即南無阿弥陀仏と顕すなり。

此の身口意の行とは五門あり、五門とは礼拝・讃嘆・作願・観察・回向の五門なり。又四修あり、恭敬・無余・無間・長時の四なり。次に三縁とは親縁・近縁・増上縁、此等は釈の趣皆是名号の徳を顕し修する姿なり。次に三心とは一切の物にをいて、始と分ち、中と分ち、終と分つが如し。凡夫生死を離れ浄土に生る体に、三の謂れあると知るなり。詮を取て先づ至誠心とは、自力の行を捨誠(すてまこと)を至し、他力に乗るを体とす。深心とは自身は現に是れ罪悪生死の凡夫と信じ、曠劫已来一善として出離の縁あることなしと、我身の体を

有のまゝに信じて、此上にかゝる罪悪生死の凡夫は弥陀の願力に摂取して往生すると信ずるを深心の体とす。次に回向発願心とは、先我が修する処の行願を以て彼国に回向して生んと思を回向の体とす。

されば三心とは、詮は只阿弥陀の願力に憑[1]をかくる心の一とすぢに定めて仏を憑む心の起る時に、彼の仏の我等が心の内に入て顕れます処を今[2]仏往生とは云なり。此の往生の体と云は、我心と阿弥陀の御心と一になり合ひたる処を云なり。かふは心得たれども何なる形ちとも不ゝ知、口より出して南無阿弥陀仏と顕すなり。是心中に思はへる仏なり。爰を以て南無とは帰命と釈し、又は発願回向と釈す。此の南無の心は我等が仏を憑む心なり。阿弥陀仏とは憑む心を彼の仏摂してある[3]処を他力の行とは申なり。されば我等が心をば南無とも云ひ、彼の仏の我等を摂し有[4]をば阿弥陀と云。彼此一に成合ひたる姿[5]を即ち仏にておはします処を南無阿弥陀仏とは申な

① 憑をかくる＝側註「乗する」
② 今＝「念」底本の「今」は誤り
③ ある＝側註「玉ふ」
④ 有＝側註「玉ふ」
⑤ を＝側註「か」

り。経に是心作仏是心是仏と説るは凡夫の心にいみじく覚[1]て仏と云には非ず。只阿弥陀仏、[2]凡夫の心にいみじく憑む心の中に入り玉ふて[3]凡夫の心を離れ玉はず。故に是心是仏とは説なり。されば往生とは、仏の御心と我心と一に成りあひたる処を云ひけるなり。今我心と仏心と一に成りたる事[4]を喩を以て心得べし。謂る枯木に火を付るに火、木を焼事速かなり。其火、木に寄合ておき(熱)となれば、何れを火何れを木とも分けられず。木とも云ひつべし火とも云つべし。是機法一体を成ずる信なり。枯木とは我等なり、一善も持たずして唯知作悪の機[5]なる故に枯木とは云なり。悪業深重の我等が為に正覚を成就し玉へる仏体に憑をかけたてまつれば、彼仏体[6]を我等が心中に入て顕れ玉ふを云んとて、如レ此火木[7]の譬を取るなり。

又水中の月の譬をなす水の性あれば月の影浮ぶ、月と水との離れざるが如くなるべし。是以仏体を知るべし。是を来迎とも云ひ、摂取不捨とも、正覚の体とも云なり。

① 覚＝側注「悟」
② 、＝「を」
③ て＝なし
④ 事＝側註「所」
⑤ 機＝「機と」
⑥ を＝側註「△の」
⑦ 木＝なし

されば南無阿弥陀仏とは、仏に望れば、十方衆生の心の上に正覚を成んと誓ひ玉へる正覚の体が顕るゝなり。我等に望れば、往生の体即仏体にておはしましたる謂を心得知までなり。然ば念仏往生は、只南無阿弥陀仏の外に又求むべきにあらず。唱る名号を[お]さ[え]①て往生の体と知るより外は又往生はなし。かく心得ぬる上には只称名の一行なり。是以釈註云、一心専念弥陀名号行住坐臥不問時節久近、念念不捨者是名正定之業順彼仏願故文と。都て往生の体は時節長短にもよらず、念仏の数にもよらず、只一念の体に極る故に、臨終をも不ゝ待平生をも云はず、善知識にあいて、今の願行具足の南無阿弥陀仏即ち往生の体と聞き得て信を生ずる計りなり。

されば往生とは全く我等が三業の行体にかゝ[へられ]②たるにあらず、定散の上に弘願の一行と立て弥陀教と定めて③、釈迦の教と云定散のつらの往生とは云はず、弘願の一行と云。観経の流通分に持④是語と云は名号なり。往生とは定散の上の得生なり。さてこそ不思議

① 側註「△し」

註 散善義深心釈

② 側註「△はり」

③ て＝なし

④ 特＝「持」
底本の「特」は誤り

の名号にて、下輩の機臨終に至て地獄の猛火現前の時、只一念の信に往生を定むるなり。往生におひて少しも疑ふ心なく決定と思ひ定めて、何なる妄心妄念発とも全く是に障られて往生不定なる事なき故に、此の仏をば無碍光と名く。

無碍光[1]とは碍りなき光りとかけり、無碍と云ふは凡夫の三毒の暗をへだてぬ御名なり。凡夫とは、いかに妄念発さじとすれども発るを凡夫とは云なり。発ればとて往生を疑ふ事はなかるべし。妄念を思のまゝに発せと云には非ず。不レ発しと困(くるしむ)とも起るとも不レ可レ疑 只仰で憑をかけたてまつるべきなり。

憑をかくるとは念を隔てず時を隔てず日を隔てず懺悔するなり。[2]懺悔すとは南無阿弥陀仏と申すなり。是の念時日三根は礼讃に云か如し。此の上には、念仏往生の信心起りなん後には、三業の行をばはげみて、平生にも臨終にも往生を示し[3]玉へと[4]祈り奉て罪をも恐るべし。是以往生を心得たる者と知るべし。されば平生の三業に於て

① 無碍光＝「無碍光仏」

② るなり＝側註「へし」

③ 示し＝「示めし」

④ と＝「は」

身に仏を拝めば仏我を見玉ふ、口に仏を讃れば仏是を聞食す、心に仏を思へば仏我を念ず。故に何れにも知れまひらせんと可レ思なり。曠劫にも聞事希なる二尊の教を聞[1]き得て、参り難き浄土に参て仏にあひ奉るほどの悦を得る上は、骨をくだき身を苦め涙を流して疾く可レ励なり。況電光朝露のあだなる命ち何つと可レ憑にあらず。此信心立なん上は縁に随て何ならん善までも随喜をなすべし。

又仏を念ずるに重々の事あり。一には仮立形像の仏を見るは極楽の六十万億の仏を知る譬へなり。六十万億の仏とは摂取不捨の如来なり。[註]如レ此三業相応して本願念仏の仏を顕す故譬へとはするなり。さて今の摂取不捨の仏は、是心作仏是仏と極めたれども、実に何れとも不レ知、口に顕して南無阿弥陀仏と知。南無阿弥陀仏の体何なる色とも不レ知、先の仮立の形像の仏を見て是を我が唱る処の南無阿弥陀仏と云ふ仏は、かゝる相好の具足[2]して[3]御座と知るなり。仮立の形像の体は猶も生身の如くならねば、真実の相好を現ぜんと思

① 聞き＝なし

註 この所に三縁中親縁釈の意を述べたる文ありて脱する欤

② して＝「の」
③ 御座＝「御座す」

ふ時は此の仮立の形像の仏より、彼の六十万億の仏を知るなり。知る故に、彼の六十万億の仏も又譬へなり。六十万億の仏も南無阿弥陀仏を知らせ仮立の仏も南無阿弥陀仏を知らせ、仮立真仏ともに[①]南無阿弥陀仏と心得入れば、今の我等が仮立の仏を見るをも南無阿弥陀仏に心得[②]る故に、真仏も仮立も同じ事皆共に譬となる也。下輩の機の我等が為には、此の仮立の仏を見るより外に別の仏を見る事無きなり。臨終に至て正く真仏を見るべし。其の真仏を見ると云ふは我唱る処の南無阿弥陀仏の顕れ玉ふ体なりけり。されば真仮一つにして仮立の仏即ち真仏となる時は、仮立は譬となりぬる処かとすれば、名号に相好光明を顕す時返て彼の六十万億の仏の相好即ち一つにして今の名号となる。何れをも只名号え取り入るゝなり。されば名号万徳の所帰と釈して、四智[③]三身十力四[④]無畏等内証の功徳、相好光明説法利生等の外用[⑤]功徳等しく名号の中にあるぞと釈するなり。爰を以て心降だれば身降だると云なり。阿弥陀の御心だにも行者の

① もに＝側註「なし」
② 心得＝「心得入」
③ 智＝「知」
④ 四＝なし
⑤ 外用＝なし

心に至り給えりぬれば、やがて相好光明を名号に具足するなり。されば臨終と平生と一同、在世と滅後と一同、見ると聞くと一同なれば、只ともかくも南無阿弥陀仏の名号より外に往生の体なきなり。

夫人は在世にて極楽を見玉ふ。我等は滅後にて此を聞くと云ふ計りなり。されば聞を本とすべきなり。仮立の仏を見る時は、是れ我心の色の仏を顕奉るなりと知るべし。かく心得へば仮立仏もいと[1]貴く覚て供養恭敬の心深なり。諸経の心は女人をば五障三従ありと嫌ひ、永く仏にならずと説けども、今の弥陀願力は、女人の心上に顕はるゝ仏と聞故に往生に於て不定の思ひある可らず。女人を以て往生の機と取るは[2]男子よりも罪深故なり。罪深しと嫌ひ捨てらるゝ処を拾ひ玉ふを今の仏とはするなり。浄摩尼珠と云玉は濁れる水を澄を以て玉の徳とす。今の弥陀濁れる女人の心に顕るゝを以て此の仏の能化の慈悲とはするなり。されば我と心[3]を澄す故に仏となるにはあらず。阿弥陀仏の濁れる我等が心中に入り顕れ玉ふ故に、仏の徳

① いと貴＝木版本には「韋提ト貴」とあり其の右横に「△　六十万億ノ仏モ斉」と註あり

② は＝なし

③ 心＝「心と」

より我等が心の濁を澄すなり。法界は釈に如来の国と釈するも、女人の心の中を云なり。道場荘厳極楽清浄と釈するも、仏の入り玉ふを以て道場とは云なり。此等の不思議の仏の御慈悲と聞ては何にも心を励み身をくだき日夜朝暮行住坐臥仏[1]仏に心をかけ奉て此度疾く浄土に参んと可レ思なり。

浄土に生れなば生生世世の父母妻子思に任て心に随て利益せん事喜びの中の悦びなり。往生を願ふと云は衆生を利益せんが為にてあるなり。故に往生を願はん人は万づ[2]の衆生に於て父母の思を成て哀みの心を至して方便を回らして利益を前きとすべきなり。是則諸仏の御心に相叶ふものなり。只所詮は南無阿弥陀仏の一行に心をかけつれば一切の行皆是れに摂まる。心の乱ん時も仏に任せ奉てともかくも我心に不レ可レ思。南無阿弥陀仏と申す計りなり。されば乱る心も正定業[3]と釈するなり。此謂を如レ此ひしと意得る処にふっと往生をばするなり。是豈に他力の往生に非ずや。

① 仏＝異本には「御」とある。

② 側註「△もろ〳〵」

③ 正定＝「清浄」

西山上人御法門也云云

亮範上人本跋云明応五年丙辰仲冬念九日於堺之北之庄常行寺傍而西山西月軒之以全本写之宗純公所望之也以此条目臨終正念于宝樹瑞華芬馥覃一切者也。

仰願　為宝楼院妙祐慧照大姉謝恩此鈔寿于梓貽諸後代且助幼学写労転筆止魯魚之誤欤流祖軍持①一滞水漫漫溢流四海補母君霊位究竟解脱妙道及与法界含霊願共往生安楽国

流祖二十世資裔　龍空義道敬白

① 軍持＝千手観音の四十手中、軍持手に持てる水瓶なり。流祖上人を観音の垂迹と伝える説による。